

徳川政権の解体と京都の与力・同心

渡邊 忠 司

〔抄 録〕

本稿は、文久の幕政改革から王政復古に至る過程を中心に、主に二條城御門番組与力関係史料を用いて、徳川政権の解体と明治維新政府の成立に伴う京都の与力・同心の動向と実態を検証する。維新政府による警察機構の編成過程が徳川政権の与力・同心体制の継承であり、それが与力・同心の歎願への維新政府の対応で

あったこと、与力・同心の名称の消滅と洛陽隊・平安隊から警固方、「巡査」に至る過程であったことを確認した。

キーワード 与力 同心 御門番組 所司代 京都町奉行 王政

復古 京都守護職 平安隊

はじめに

慶応四年（一八六八、九月八日改元、明治元年）正月、元京都町奉行組与力・同心らは岩倉具視執事山本復一郎宛に「奉歎願口上書」と題された歎願書を差し出した^①。

奉歎願口上書

私共同局旧臘坂地江罷越候後、未立帰もの共之別紙家族之もの共儀、手職仕或者家財等売払又ハ親類杯之助力等を以漸此節迄細々取凌罷在候得共、何分職業も抄々敷出来不申追々難渋ニ相成、信

義を不失様親類よりも成丈ヶ救合候得共、局中一統之難渋ニ而難行届、此上之活計不覚束及場合、此姿ニ而ハ差迫万一心得違いたし候もの出来候而ハ、第一奉恐懼候、右之趣御慈察、格別之以御仁憐御救助被成下候得者、家族一統広大之聖慮、実以難有可奉感裁候、依之先達而より御救助頂戴仕候塩津善之助外式人家族之ものハ相除、別紙家族人数書差上、此段謹而奉歎願候、以上、

元町奉行組家族取締

慶応四辰年正月

村山 富右衛門印

森 善右衛門印

表1 徳川政権の京都役職と与力・同心

役 職	与力(騎)	(同心、人)	与力給与	同心給米	備 考
所司代 組	50	100	200 石	10石三扶持	宝暦九年同心76人 切米御扶持不同
禁裏附(二組)	(20)	(80)	150	(10石三人扶持)	
一組	10	40			
二条城在番(二組)	(20)	(40)	150	10石三人扶持	合力米120石四月代り 切米御扶持不同
一組	10	20			
二条御鉄砲奉行二組	—	10	—	(10石三人扶持)	蔵番3人(3石5斗扶持不同)
一組	—	(5)	—		
二条御蔵衆二人		手代8人	—	(10両三人扶持)	
二条御殿番一人					
御殿掃除方同心	—	11	—	切米扶持方不同	
京都町奉行所	40	100	200	10石三人扶持	
西町	(20)	(50)			
東町	(20)	(50)			
京都代官					手代18人
小堀禁裏附					役席元々3人 金方3人 御所御蔵方2人 御所修理方2人 川方2人 地方6人
伏見奉行(一名)	10	30	200	10石三人扶持	
奈良奉行(一名)	6	30	200	10石三人扶持	

備考：宝暦9年「袖中武鑑」(『京都武鑑』上、叢書京都の史料8)による。

岩倉殿御執事

山本復一郎殿

飯室一郎印

一六〇

これは慶応三年十月十二日の大政奉還勅許に始まり、十二月九日の王政復古によって徳川政権が解体した後、京都町奉行所の元組与力らが「職」を失い、手職や家財の売却などで家族を含めた生活を凌いでいたが、生活の計らいも覚束ない状況となっていたため、この後の新たな職と救済を岩倉具視に求めて差し出した歎願書である。ここには大政奉還後徳川慶喜に従い「旧臘」(陰暦で慶応三年十二月)に坂地(大坂)に下ったことや、京都町奉行所の廃止で生活がままならなかったことなどを書き上げている。

徳川政権の崩壊は、京都に限らず各地奉行に配属されていた与力・同心には拠って立つ支柱の崩壊であり、それはまた徳川政権与力・同心体制の解体でもあった。^②近世京都の与力・同心は表1に示したように、所司代・町奉行ほか各奉行に約五百人が配属されていた。これらすべての与力・同心が大政奉還によって行き場を失ったのである。

徳川政権期を通じ、京都市中・町民の警固と治安維持はこれら与力・同心らによって確保されていた。尊皇攘夷や佐幕、薩長同盟、王政復古、明治維新など政治的変動に関わる研究は違がないが、これら与力・同心の動向や実態解明に関する研究はほとんどない。それゆえに文久二年(一八六二)八月二十八日に始まる幕政改革後から維新政府成立にかけての政権交代期に、与力・同心がいかに対応していたかの検証は急務であろう。^③

京都の与力・同心らは政変と役職の廃止・改革によって翻弄されていた。この事態に対し元与力・同心らが取った行動は、一つは慶喜の大坂退散に従って大坂に下ったこと、二つは慶喜の大坂脱出後に京都に帰り、新政府へ登用を歎願したことであった。現在のところ、京都の与力・同心は王政復古後に維新政府の警察機構（治安維持機構）へ再編成されていくことが確認されている。それは洛陽隊から平安隊、次いで警固方へと名称変更を行いながら新政府の兵隊組織から羅卒・番人・羅卒から巡查へという新政権の警察機構・下級官吏へ改変・編成されていく過程である。⁴⁾

本稿は、文久の幕政改革から慶応三年（一八六七）十二月九日の王政復古とその後に至る過程を中心に、徳川政権の解体と明治維新政府の成立に伴う京都の与力・同心の動向と実態を検証する。それは、維新政府による徳川政権の与力・同心体制の継承と、維新政府警察機構への再編成過程の検証でもある。また与力・同心の名称の消滅と「巡查」に至る再編経過の検証は、維新政府による徳川政権の京都市中管理体制と機構の継承・再編過程を検証・確認することでもある。

一 文久の幕政改革と与力・同心

徳川政権の京都支配・行政機構は天保以後から慶応にかけて改変・再編成されたが、なかでも文久二年（一八六二）八月の幕政改革に始まる改変と再編成は徳川政権が政権維持のために行った改革でもあった。それは、諸大名に対しては参勤交代制度の緩和であり、京都にお

いては、表2に見られるように、同年閏八月七日の京都守護職設置と十二月二十四日の松平容保の入洛、同三年一月二十八日の浪士組（後の新選組）入洛、元治元年（一八六四）四月二十六日の京都見廻役・見廻組の新設、慶応三年（一八六七）六月二十九日の京都町奉行所併合などに示されている。

京都守護職は京都所司代の権限を越える存在として設置されたが、直接には市中の警察・治安維持のためではなく、京都町民の警固や保全のためでもなかった。その設置は禁裏とそれを基軸にした薩摩・長州ら勤王派に対する軍事的対抗であり、所司代・町奉行では覆いきれない京都市中の軍事的管轄を職務として設置されたと見られている。⁵⁾

またその設置は、京都所司代・町奉行所を基軸にした京都市中の警固体制と治安維持体制の改変であり、あえてこの後の変動をみていえば徳川政権の京都支配体制の解体の始まりであった。それとともに重要な改変は所司代組・町奉行組ほか京都の与力・同心の体制も変化し、役職や身分的な改変があったことである。

その観点からすると、与力・同心にとつての改革は、直接には文久二年閏八月二十八日に老中板倉周防守勝静が大目付・御目付へ申し渡した「御抱場より御譜代場江転役之令」⁶⁾にあったといえる。

御目見以下。御抱場相勤候者。御譜代場江転役被_レ仰付_二候得_一。

唯今迄全く御譜代之者同様。跡目等被_レ仰付_二候得_一共。自今ハ御抱場相勤之もの。御譜代場江被_レ仰付_二候而_一茂。改而御譜代ニ可_レ被_レ仰付_二旨。申渡無_レ之内者身分御抱と可_二相心得_一候。

但其身追々転役。御目見以上御役場江も被_レ仰付_二候ハ_一。分

而御譜代之申渡無^レ之候而茂。是迄之通可^ニ相心得^一候、
右之趣。組支配有^レ之候向々江可^レ被^レ達候。

これは組支配のある役所・役人に向けた達し書で、与力・同心を配属された遠国奉行・遠国役人すべてに出されている。この通達以前は御目見以下の御抱場勤務の者が御譜代場へ転役した場合、跡目相続が御譜代同様に処遇されていたが、これ以後は御譜代扱いにする旨の申渡がなければ御抱のままであることを心得よという主旨である。

この通達は、旗本・御家人ら徳川家臣団の身分的区分が譜代と「御譜代並」、目見以上と以下、御譜代場と御抱場であったが、そのうちの目見以下の身分的表示ないし取扱を変更したことを意味している。京都の与力・同心も「周防守殿御申渡」を承けて、御目見以下の者で御抱場勤務の者の身分的な表示に変化があった。たとえば御門番組の与力・同心の場合、いずれも御目見以下で基本的には抱ではあったが、与力はこの通達が出されるまでは御譜代並で上下席同等として扱われていたため、譜代並の役席に勤務となれば同時に譜代並に扱われていた。それが御譜代場勤務となったとしても、譜代としての申渡がなければ抱のままの処遇ということになった。

与力・同心らは目見以下であったが、京都に限らず大坂ほかの与力・同心たちも譜代身分としての確認を老中ら幕閣に求めていた。与力・同心は頭（所司代や各地奉行など）の交代時には新規の誓書を差し出したが、その度ごとに、同心は別にして与力は譜代としての身分確認を求めている。京都町奉行や二條城御門番組の与力もまた頭の交代と新規の誓書取り交わしの際に譜代身分確認の要望書を差し出して

いた。⁽⁸⁾

この身分取扱上の改変は役料の改変も含めて与力と同心の官吏としての上下関係や身分的差違を解消した。慶応三年六月二十九日には京都東西町奉行所の併合、七月八日には大坂東西町奉行所の併合があり、与力・同心らはその呼称と区分がなくなった。役職名も支配調役と支配調役並、支配調役並勤方へと変更されているが、その前提がこの身分的処遇の変更であったといえよう。

よく知られているように、この身分表示・待遇の確認に基づいて、明治三年十一月の太政官布告では府県貫属となり、与力は士族、同心は卒への区分が行われている。京都西町奉行所与力であった木村氏の記録には「太政官通達覚」が残る。⁽⁹⁾

府縣貫属之内旧幕ニ於躰躰之間取扱以上之者ヲ士族、其以下之者ヲ卒ト被相定候事、

但文久二戌年八月以後ハ躰躰之間ニ取扱相成候トモ、改而譜代之申渡無之者卒たるへき事

庚午

十一月

太政官

右之通被 仰出候間、為心得相達候事、

庚午

十二月

留守居

徳川家譜代の旗本は江戸城躰躰の間詰であったが、新政府にあってそれが基準となり、躰躰間詰以上が士族身分に改称された。与力は多くが士族となり、同心は卒になっている。木村氏は与力であったことから士族に列せられ、京都執事となり、また御門番組の与力丹羽紀

五郎も士族となっている¹⁰⁾。文久二年の幕政改革は与力・同心ら目見以下の幕臣にとつてはこれ以後の社会的処遇にかかわることであつたといえよう。

二 王政復古と与力・同心の動向

(一) 徳川政権京都役職の廃止

文久の幕政改革後、いくつかの経過を経て大政奉還となるが、同時に京都守護職・所司代が廃止された。京都町奉行所も同年十二月十一日に廃止された。徳川政権の解体である。その後の王政復古を承けて、慶喜は慶応三年十二月十二日に大坂城へ向かった。

『続徳川実紀』（以下『続実紀』）に記されるように、当該役職者は職免され、十二日には慶喜の將軍職辞退が認められた。この経緯を『続実紀』は同月九日の記事として「此日將軍職御辞退被_レ聞食_二」および守護職と所司代の免職、さらには「十二日 此日於_二坂地_一被_レ触_二將軍職御辞退御聞届之事_一」と記している¹¹⁾。

表2に示したように、京都には徳川政権の役職は將軍をはじめとしてすべて京都から離れ、それに付随する官吏も存在しなくなり、京都の与力・同心も職務から排除された。京都町奉行所廃止の触書は京都市中のほか山城国中にも触れられた。これが京都町奉行(所)に関する最後の触書であつたが、触書には「右十一日廻ル」と付記されており、同月十一日に山城国と市中組町へ廻文された¹²⁾。

これに伴つて京都町奉行所の与力・同心も廃止され、またこれ以外

の禁裏附や二條城の大番組付、御門番組、蔵奉行などの与力・同心も廃止された。触書は周知の範囲が山城国中になつており、さきの東西両町奉行所の統合に対応した発布であつたことと、廃止に伴う市中警固への対応も指示され、それに関する但し書も「右触書早々組町へ御廻し可被成候」として、町方への早急な廻文も指示されている。

この事態に対し、新政府は同十二月十三日に京都市中の治安維持・警固のために「列藩」に禁門警固を命じ「兵士戒服」のままで召し出した。また市中の警固・取締は青山左京太夫・本多主膳正・松平図書頭等へ命じ、さらに市中鎮撫の見廻りを加藤遠江守・加藤能登

表2 文久～明治元年期の京都市中警固体制の変遷

年次	主な事項
文久2年(1862)	8/1 松平容保京都守護職任命
	12/24 京都守護職容保入洛
	3年 1/5 徳川慶喜入洛
	1/28 浪士組入洛
	3/13 幕府浪士組に帰府を命ずる。 残留組が新撰組結成(守護職配下)
元治元年(1864)	4/26 京都見廻役→見廻組
	7/19 蛤御門の変
慶応3年(1867)	6/29 京都町奉行所の併合
	10/15 大政奉還の勅許
	12/9 王政復古。京都町奉行所廃止
	12/13 京都市中取締役・市中火消役、 膳所・篠山・亀山三藩を任命
	12/13 平戸など六藩市中見廻役
	12/28 雑色、盗賊筋御用触頭
	4年明治元年(1868)8/10 京都府洛陽隊京都府兵創設
明治2年	8/15 平安隊と改称(400名)
	1/11 東町奉行役所を市中取締所へ
	12/5 平安隊規則など規定(発足)
明治2年	7/3 平安隊を警固方に改称(750人)

備考：丹羽家文書、『京都の歴史』年表・索引ほかによる。

守・松浦肥前守・小出伊勢守・植村駿河守・亀井隠岐守に申し達している。これを十二月十四日には上京・下京三役に申し渡し、市中へ触れ出している¹⁹。

徳川政権の解体に際しては、元守護職・所司代・京都町奉行ら大名・旗本は江戸あるいはその領国に退散したとしても、与力・同心以下の下級官吏は地付・土着の武士とみなされて世襲的に職務を継承していたので、行き場をなくし、旧来の役職も自分たちの位置づけも失った。大名や旗本らと違って、与力・同心らは王政復古という事態に独自に対応せざるを得なかったのである。

王政復古後の元与力・同心らの対応は、冒頭に掲げた元町奉行組与力の歎願書に示されているように、大政奉還後の慶喜の大坂城入城と、慶喜の大坂脱出・江戸帰還によって大きく変化した。「主君」を失った与力・同心の行動が京都へ帰ることであり、土着・地付の武士として京都で新たな生活の基盤を確保することであった。元町奉行組だけではなく京都の与力・同心が差し出した歎願書はそのための新政府、特に岩倉殿への歎願である。

（二）与力・同心の「下坂」

慶喜の大坂退散に従った与力・同心の下坂は慶応三年の十二月十一日以後のことである。この実態を検証しておきたい。与力・同心の下坂は、新撰組・見廻組も下坂していることから徳川政権の官吏（与力・同心）で「御譜代並」という意識から自発的に慶喜の大坂下向に従ったとみられる。ところが慶喜が早々に江戸に帰還したため、混乱

表3 下坂与力・同心の内訳（元城番組）

区分	下坂	京居残	帰京	退散	不帰京
与力	10	3	1	6	2
同心	5	2	3	21	14
与力見習	2	1	2	4	4
同心見習	0	0	0	2	1
計	17	6	6	33	21

備考：丹羽家文書「姓名書」「人数書」等による。

したなかでそれぞれの思惑で大坂を退散したと推測される。そのために、大多数は帰京しているが、一部は残留したか慶応四年正月三日の鳥羽伏見の戦い（戊辰戦争）で行方不明となった者もいたようである。未帰京者は見習与力・同心が多く、若年ゆえの思い入れからこの戦いに参加したと推測される。

与力・同心のすべてが大坂に下ったわけではなかったが、具体的な内訳を御門番組の場合で確かめておく。表3・表4は「元二条城番組姓名帳」とその「歎願書」などによって整理した慶応三年十二月から同四年五月にかけての与力・同心の動向である¹⁴。これは慶応四年正月・二月・五月にかけて岩倉殿へ建白をし、それに対して新規登用の材料とするために、歎願書、下坂した者・在京の者・未帰京の者の区分と、その家族数、人物・品格・才芸などを書き上げさせた帳面で、それに基づく下坂者・在京者の一覧である。冒頭部分の記載形式を掲げておく。

一 剣・馬術少々心掛罷在候

与力 内藤捨一郎
同心 喜多共助
生年廿八歳

木寺民之助
生年廿五歳

生年拾四歳

表4 王政復古後の与力・同心の動向内訳(御門番組)

下坂者名	下坂日	帰京日	再下坂	再帰京	在京者名	未帰京者名
与 力						渡邊鱗三郎(時之進忰見習)
(北) 渡邊時之進(51)	12/12	12/15				
(北) 藤田武一郎(65)						
(北) 丹羽紀五郎(36)						
(南) 早苗可郎(18)	12/12	12/18				
(南) 藤田九郎兵衛(47)	12/12	12/20				
(北) 鈴木重兵衛(60)						
(北) 佐治武兵衛(47)						佐治武造(武兵衛忰見習)
(北) 村田勝太郎(51)	12/12	12/24				
(北) 藤井御弥(21)						
(南) 野条守(23)						
(南) 中川登代蔵(19)						
(北) 関戸波三郎(41)	12/12	12/20	12/27	1/5		
(北) 小倉弥平(61)						小倉米次郎(弥平忰見習)
(北) 中川萬次郎(50)	12/12	1/9				
(北) 岡山録之助(29)	12/12	1/10				
(北) 藤田嘉助(41)	12/12	12/15	12/18	1/10		
(北) 内藤音三郎(64)	12/12	12/5	12/18	1/9		
(南) 須賀井發之丞(36)	12/12	12/21	12/22	1/10		
(南) 城才吉(18)	12/12	12/17				
(北) 藤田青次郎(16)	12/12	12/19				
(北) 鈴木森之助(32)	12/12	12/15	12/18	1/16		
(北) 岡山弥之助(29)	12/12	1/10				
同 心						
(北) 井上郁之助(32)	12/12	12/24				
(北) 法貴弘五郎(34)						法貴次郎兵衛(45)
(北) 小原湊吉(26)	12/12	1/10				
(北) 木寺専造(53)	12/12	12/15	12/18	12/24		木寺朝吉(専造見習)
(北) 原田喜八(31)	12/12	12/15	12/18	1/10	土肥傳吾(55)	
(北) 山田順八郎(34)	12/12	12/25	12/29	1/13	並河啓太郎(35)	
(北) 川勝栄左衛門(31)	12/12	12/15	12/18	1/15	山崎直之進(20)	
(北) 大西政吉(29)	12/12	12/15	12/19	1/14	大西政之進(22)	
(南) 永野篤三郎(32)	12/12	12/24	12/27	1/20	青木左源太(48)	
(南) 田邊教三郎(21)	12/12	12/20			高梨儀助	高梨克之助(見習)
(北) 安井左衛門(34)	12/12	12/15	12/19	1/23		柘植禎次郎(見習)
(南) 山本兜太(23)	12/12	12/26				
(北) 有馬剛三郎(43)	12/26	1/21				
(北) 小嶋激太(25)	12/12	12/24	12/27	1/14		
(北) 有馬繁太郎(16)	12/12	12/21				
(?) 細井国之助(39)	12/12	2/1			金原嘉伝治	金原万蔵(傳次郎忰見習)

備考：丹羽家文書「元二条城番組姓名帳」、「歎願書」ほかによる。() 内は年齢。

居合嗜罷在候
下坂仕立帰候分
一 剣術少々心掛罷在候

与力

渡邊時之進

生年五拾壹歳

旧臘十二日下坂、同十五日立帰在京

与力

藤田武一郎

生年六拾五歳

一 劔・槍術少々心掛罷在候
砲術少々心掛罷在候
右同断

これによると、内藤ら三人は在京したままであったが、渡邊時之

進・藤田武一郎は下坂して立ち返った者たちであった。その一覧は表

表5 二条城在番衆

役 職	定員	与力	同心	手代	備 考
大番頭	2	10(20)	20(40)	8	毎年4月交代 与力150石
御城番	2				切米・扶持方不同
御殿番	1				
御鉄砲奉行	2				3石5斗1人扶持 切米・扶持不同
御蔵衆	2	5(10)			
蔵 番	3			11	
御殿掃除方					
同心	3				
仲仕頭	6				
太鼓方坊主					

備考：『京都武鑑』上、『京都御役所向大概覚書』上巻による。

3に示したが、下坂・帰京等を区分けし、それぞれの特技が書き上げられている。これは後にみるように、新政府の登用のための調査でもあった。

表3には下坂者・在京者・未帰京者の人数が示されているが、退散とは慶喜の大坂脱出を受けて帰京した者の人数である。退散も帰京も一度は下坂した者であるから、下坂総数は五六人となり、京居残六人と合わせると六二人となる。未帰京者が二人いるが、同心と見習の与力・同心が多い。また表4には慶応

三年の十二月十二日に下坂し、早い者で三日後の十五日には帰京している。十二月十二日の日付が慶喜に従った下坂であったことを示している。帰京後に再度下坂した者もあり、この記録によると最も遅い帰京者は翌年の二月一日であった。

二条城御門番組は与力一〇騎・同心二〇人が一組で二組あったから総数は二〇騎・四〇人となる。総数が超過しているが、これは一度帰京して再度下坂した者もいたためである（表4、表5）。

帰京した与力・同心は、新政府に対して新たな職場を求めて「歎願書」や「再勤歎願書」を差し出している。この内実は後に検討するが、元与力・同心の歎願書が岩倉殿の執事宛になった背景には、徳川政権京都役職の廃止後に、与力・同心が新政府の御用で、慶応四年正月十五日に尾張藩の旧領を岩倉殿に引き渡す職務を勤めたことにある。新政府からみれば、徳川政権の京都役職が廃止され、直接の政務を実行する者がいなかったために、京都の土着・地付の武士、それも旧政権の実務担当役人であった与力・同心を用いたとみられる。はからずも京都の元与力・同心にとってはこの職務が新政府に命じられた最初の仕事となり、岩倉との関係を作り出す契機となったのである。

「尾張殿旧領岩倉殿へ引渡相勤二付覚」題された記録には、御門番組の在京与力ら二三名がこの職務に就いている。帰京後の歎願書はこれをたよりに、新政府への新規登用を求め、岩倉殿への取次を元二条城御殿預三輪嘉之助に要請したのである。¹⁵⁾

今般尾張殿御領私共儀去ル十五日岩倉殿江御引渡相成候処、勤王相励尽微忠赤心之趣奉願置候得者、万一心得違之者有之候

表6 家族立退先一覧

名前	立ち退き場所
○早苗可郎	中立売浄福寺東江入西光寺
山本兜太	中立売日暮
中嶋撰三	千本通下立売上ル大黒屋かね
○丹羽紀五郎	御前通下立売下ル丹波屋弥兵衛
山田治兵衛	下立売千本東へ入玉屋やゑ
小原萬五郎	出水通七本松角慈眼寺
林経蔵	出水通七本松角慈眼寺
○鈴木重兵衛	妙心寺南門前赤沢常柏
○佐治武兵衛	妙心寺南門前赤沢常柏
田邊教次郎	岩上四條上ル津田
原田禎之助	上長志町日暮東へ入ル
○藤田九郎兵衛	御前通大將軍突当り橋屋又吉
○内藤音五郎	西七条油屋源助
於気幾兵衛	新シ町御池上ル高田隠居
三浦源之助	一条通千本西へ入一條殿御内服部主膳
○城才吉	帯屋川町百姓権兵衛
木寺專造	大將軍村内百姓七左衛門
○渡邊時之進	小北山村百姓半兵衛
○関戸波三郎	小北山村百姓半兵衛
○須加井發之丞	下久世村医師中川順蔵
○中川萬次郎	下久世村医師中川順蔵
○村田勝太郎	物集女村中山武左衛門
○藤田武一郎	西院村米屋与助
小原鑽吉	西院村米屋与助
○金原嘉伝次	西院村百姓巳之助
○藤井御弥	岡崎村笠原
高梨儀助	北山薬師山百姓山村勘兵衛
小原要作	北山薬師山百姓山村勘兵衛
山田順八郎	聖護院村
井上敬之助	堅木原西長野新田木屋善兵衛
小嶋激太	等持院村明清寺
磯野太三郎	等持院村明清寺
永野篤三郎	等持院村枝郷伊之助
服部儀平次	山之内村百姓新左衛門
法貴弘五郎	梅ヶ畑平岡村惣助
大西政八郎	嵯峨角倉家中九里文治
○岡山祿之助	大津円満院宮内内河村喜間太
宮川牧太	丹芴元尾村医師宮川柳助
有馬剛三郎	麩屋町二条下ル上野儀三郎
○内藤捨市郎	千本下立売東へ入丹波屋要助
○鈴木為之助	両替富小路竹屋町南下ル若狭仁兵衛
○小倉弥平	紫野大徳寺上野村上田又四郎
細井季三	下立売御前通東へ入富田屋
永野辰之助	松屋町出水上ル尾張屋徳兵衛
柘植哲三郎	大將軍御前通下ル尾寄金吾
木寺	無所
法貴	無所

備考：丹羽家文書「家族共立退場所書付」（慶応四年辰正月）による。○印は与力。

署名している二三名は表7に示した。その中には見習の与力も二名いたが、他の歎願書も同様に見習も含めて署名者となっており、元与

三輪嘉之助殿

藤田武一郎同 見習 藤田嘉助（印）
鈴木重兵衛同 鈴木専之助（印）
（中略）
在京之者 野條作右衛門（印）
同 藤田武一郎（印）

而者恐入候儀ニ付再応御糺御座候間、猶又得与取調候処、反復二心之者一切無御座候間、為後証一統連印仕、此段申上候、右之趣御執成宜御申上可被下候、以上、
慶応四辰年正月

力・同心一体となった歎願であった
京都の与力・同心たちはこれを機縁に、新政府で関係のある人物として岩倉殿を頼ることとなったのである。また宛先が三輪嘉之助であることは、二條御門番組だけでなく、他の与力・同心らも動員されていたとみてよい。

（三）与力・同心屋敷からの立ち退き

徳川政権の解体によって、与力・同心が直面したもう一つの緊急事態は旧来の役宅であった与力・同心屋敷からの立ち退きであった。表6は慶応四年正月十日に書き上げられた、二條城御門番組与力・同心の立ち退き先である。冒頭の町奉行組与力・同心の歎願口上書にもあ

表 7 歎願書署名者慶応四辰年正月三輪宛歎願書

正月(尾張領引渡)	正月(帰京在京)	正月(下坂、後帰京)	正月(病氣在京)	正月29日再差出
野 條作右衛門 藤 田 武一郎 鈴 木 重兵衛 渡 邊 時之進 村 田 勝太郎 佐 治 武兵衛 丹 羽 紀五郎 内 藤 捨一郎 藤 井 御 弥 関 戸 波三郎 木 寺 專 造 井 上 郁之助 法 貴 弘太郎 中 川 萬次郎 小 倉 弥 平 岡 山 田 録之助 原 田 順八郎 山 川 勝□左衛門 大 西 政 吉 永 野 篤三郎 藤 田 嘉 助 鈴 木 專之助	木 寺 專 造 藤 田 武 兵 衛 鈴 木 重 兵 衛 渡 邊 時 之 進 村 田 勝太郎 佐 治 武兵衛 丹 羽 紀五郎 内 藤 捨市郎 藤 井 御 弥 木 寺 守 造 土 肥 傳 吉 並 河 啓太郎 井 上 郁之助 法 貴 弘五郎 山 崎 直之助 大 西 政之助	内 藤 音三郎 藤 田 九郎兵衛 須賀井 發之丞 城 才 吉 早 苗 可 郎 有 馬 剛三郎 田 邊 教三郎 小 嶋 激 太 藤 田 春次郎 有 馬 繁太郎 安 井 佐右衛門 山 本 兜 太	小 原 弥太郎 山 田 森之丞	小 原 弥太郎 松 波 勇之進 中 嶋 平 吉
23人	16人	12人	2人	3人

備考：丹羽家文書による。
内藤は「全下坂不仕候」、並河には「仕事」との頭注がある。
藤田春次郎は藤田九郎兵衛倅見習
有馬繁太郎は有馬剛三郎倅見習

るように、職場を失って細々と生活している状態であったが、それを助長、深刻にしていた事態が旧居住地からの立ち退きであった。これは二條城をはじめ周辺の徳川政権下での所司代・町奉行屋敷、諸奉行と与力・同心ら役人屋敷が新政府の接収と管理に移行したためである。政権交代・政変からみれば当然のことであったが、役職大名や旗本と違って、京都を離れることができない「土着」の官吏には生活の破綻であり、生死にかかわる事態であった。

御門番組元与力・同心は慶応四年正月に三輪嘉之助宛に歎願書を差し出しているが、そのときの署名者は木寺ほか与力十六人が連署して出されている(表7)が、その下書とみられる「口上之覚」が残されている。¹⁶⁾

口上之覚

私共儀者元京都二條城御番組与力・同心ニ而、二百五十有余年土着之者ニ御座候処、一昨寅年九月(數行抹消アリ)旧臘十二月十二日大坂表江罷越候「」御座候得共、私共之内老衰・宿病之者ハ滞京仕居候処、今般不容易形勢ニ相成、差向拾六人之者ハ流浪仕、当惑之儘居宅ニ住居罷在候処絶言語候御時勢ニ相成候、就而者 尾張殿御預り相成謹慎ニ罷在候処、今般奉恐入候御触之趣奉承伏候、私共者累代

皇都生産之者ニ付、素々国家御為粉骨砕身勤王之御奉公相励、尽微忠环赤心ニ御座候間、何卒於京師相

応之御用向被 仰付被下置候ハ、重々難有仕合可奉存候、前書拾六人之外離散罷在候者茂御座候得共、先私共御連判、此段奉願上候、右之趣其御筋江急速御取成可被成下候様奉願上候、以上、

慶応四辰年正月

木寺 專造(印)

藤田 武一郎(印)

鈴木 重兵衛(印)

(中略)

大西 政之助(他十六人)

△三輪嘉之助殿

宛先が三輪嘉之助となっているのは、三輪が元二條城勤務の与力・同心らが岩倉殿へ歎願する際の惣代であったことによっている。¹⁷⁾署名・歎願は一六人であるが、中には「半下坂不仕候 ○内藤捨市郎」のように在京し、全く下坂しなかった者も含んでいる。また「前書拾六人之外離散罷在候者茂御座候得共」とあるように、一六人以外に離散した者たちもいるが、取り敢えず一六人で歎願したとしている。

立ち退きに関連して注目したいことは、「今般不容易形勢ニ相成、差向拾六人之者ハ流浪仕、当惑之儘居宅ニ住居罷在候処絶言語候御時勢ニ相成候」とある箇所である。ここには政変によつて容易ならざる形勢になり、「当惑之儘居宅ニ住居」していたところ「絶言語候御時勢」になったとある。これは与力・同心らが政奉還後も旧来の居宅に居住していたところ、立ち退きを命じられ、与力・同心は家族を伴つて市中や洛外近在の縁者を頼つて移転したことを示している。

御門番組の記録「家族共立退場所書付」によれば、差出は慶応四年

正月十日、与力・同心のうち山本兜太や原田禎之助などは市中に持家があつたとみられるが、表6に示したように、移転先の多くは市中の商人や寺院、医師、公家の家臣、また近郊の百姓、医師などの居宅であつた。なかには近江の天津や丹波の村落に移っている者もいる。小原・林は慈眼寺、鈴木・佐治は赤沢常柏屋敷、渡邊・関戸は百姓半兵衛の居宅に移るなど同所に移転した者がかなりおり、また木寺・法貴のように「無所」の者も見られるように、この立ち退き命令が突然であつたことを窺わせる。

これらの状況を見ると、大政奉還・王政復古と其後の慶喜の江戸帰還によつて、与力・同心らが生活の拠点を失い、政変に翻弄されていたといつてよいであろう。

三 元与力・同心の求職活動

(一) 岩倉殿への歎願と「建白」

大政奉還・王政復古という状況に対して、京都の与力・同心も勤め先の喪失と居宅の立ち退きなどがあり、まさに当惑のままに成すこともなく迷い「十方」(途方)に暮れていたのが実情であつた。旧役宅からの立ち退きや、官吏としての職を失つたことで、与力・同心の家族も困窮していた。

慶応四年(一八六八)五月の「奉歎願口上書」に添えられた書簡「家族困窮ニ付奉願口上書」にはその一端が記されている。¹⁸⁾口上書は元城番組惣代(藤田武一郎・鈴木重兵衛・小倉弥平^(弥平次カ))が三輪嘉之助宛

に差し出したが、そこには未帰京の同心小嶋激太の家族の困窮と救済願が書き上げられている。

家族困窮ニ付奉願上口上書

元城番組

小嶋激太儀旧臘下坂仕未帰京不仕候処、兼而困窮仕候ニ付家族之者差向飯米難相調必至難渋ニ差詰罷在候間、何卒出格之御憐愍を以御救助被下置候様、偏奉願上候、以上、

卯辰の間違いカ）

惣代

二月

藤田武一郎

鈴木重兵衛

小倉 弥平

三輪嘉之助殿

ここには、小嶋の家族が困窮して飯米も調えがなくなっていると救助を願っている。小嶋の家族は、山城国久世郡等持院村明清寺（京都市南区）に、同心磯野太三郎の家族とともに立ち退いていた。

王政復帰後の与力・同心はまさに一日の食事に差し詰まるほど、途方にくれざるを得ない状況にあった。この言語に絶する事態に、冒頭に掲げた元町奉行組与力・同心の歎願書に記されているように、状況を打開する行動が新政府への再勤願であり、とくに岩倉殿への歎願であった。

与力・同心が岩倉殿へ歎願する経緯は、新政府が慶応四年正月十五日の尾張藩旧領引き渡しに与力・同心を動員したことにあった。与力・同心は歎願を「建白」と称しているが、その内容は京都の与力・

同心一体となった求職歎願であった。下坂・未帰京者の家族等が手職（内職）や家財の売り払い、親類の助力などで細々と凌いでいる状態で、新たな収入を得るあてもなく難渋になってきているので、すぐにも新政府の御用があればさせてほしい、という新政府への登用願であった。

御門番組の与力・同心一二名は慶応四年正月九日付の「歎願書」を三輪嘉之助宛に差し出したが、前出の元町奉行組の歎願口上書と御門番組与力・同心の「口上書之覚」とほぼ同じ文言が並ぶ。その冒頭部分には、二五〇有余年の土着を言い、大坂下坂へのお供と、「勤王之赤心」から大坂を退散したが「立所に迷い十方ニ暮」といると強調して、新政府での職務が与えられることを歎願している¹⁹⁾。

歎願書

私共儀者元京都二條城番組與力・同心ニ而式百五拾有余年土着之者ニ御座候処、旧冬大坂御下坂之趣ニ付御供仕罷下候処、当春不容易奉恐入候形勢ニ相成、素々勤

王之赤心ニ御座候処ニ付坂地退散、今日立所迷十方ニ暮罷在候処、厚 御憐政之趣奉御帰京仕候、迎も御用立候者無御座候得共、当今急務之 御用ニ茂被 召仕被下置候者抛身命国家之御為奉竭微忠度悔悟之条々以神偽之儀無御座候、以御慈憐願之趣被聞召候様御披露奉願候、恐々惶々謹言

慶応四辰年正月

内藤 音三郎

藤田 九郎兵衛

（署名者一〇名略）

署名者は前出の一六人とは異なった見習同心も含む一二名である。

表7は、二條御門番組の与力・同心が差し出した歎願書署名者の一覧である。さきの一六名による歎願書にもあるように、滞京していた一六名が歎願したあとに帰京した一二名が同様の歎願を差し出したが、同様に何人かがそれぞれに三輪宛に再勤願を差し出していた。

下坂者も、老衰・病気による在京者も王政復古に伴う徳川政権の役職の廃止に直面して職を失い、「流浪」の状態で旧来の居宅に住居していたが、新政府の樹立という「絶言語」する時勢に対して「二百五十有余年土着之者」と強調し、勤王の御奉公を励むことを誓って、新政府に「京師相応之御用」を願っている。

京都の与力・同心たちは、慶喜の家臣団の一員として大坂に向かったが、大名・旗本・御家人らとは違い、土着・地付の武士と見られていたことから徳川政権の崩壊後には行き場を失っていた。帰京した与力・同心らはその状況を自覚しながら、慶応四年正月からの新政府への再勤歎願行動を行ったのである。

覚書に「流浪」などと記しているように、与力・同心らは旧来の住居を追われ、稼ぎ場も失った。京都の与力・同心がとった行動は新政府、特に岩倉具視への「建白」と求職行動であった。建白は歎願書と題されて、前出町奉行組や御門番組から差し出され、本格的な求職活動が展開される⁽²⁰⁾。

(二) 求職歎願の経過

表7に見られるように、御門番組の与力・同心も慶応四年正月に、

九日・十五日・二十九日付けを含めて、合わせて少なくとも五度の歎願書を差し出している。いずれも岩倉殿執事の山本復一郎宛である。目的は尾張領引渡への動員を契機に、それを拠り所とした新政府への登用であった。

これは正月二十七日の兵議所から屯所を通じて御門番組元与力・同心一同に出された廻章には、病気や他の勤務で「未勤」の者らも「矢張 岩倉殿御預り」になったことが決定されたとある。岩倉殿は新政府において京都の元与力・同心一同を預かる立場になっていた⁽²¹⁾。

この廻章は一月二十七日に組内屯所から元与力・同心へ出されている。これには、岩倉殿の預りと「早々御廻し被下候」の肩書があり、これを根拠に正月から五月にかけての岩倉殿への建白こと歎願書が差し出されたのである。

廻章

早々御廻し被下候

一大西政之助殿快気届并小嶋激太殿家族難渋歎願書共式通差出候

処、右扣沓通も明日可差出候旨兵議所ニ而被申聞候、

一見習之者尚取調、過日差出候通之願書可差出旨、同所ニ而被申聞候、

一土肥傳兵衛殿・並河啓太郎殿兩人者勤ニ罷出ニ付、平松殿御預り之事、

一右外一同未勤ニ不罷出向者、矢張 岩倉殿御預り之段被相達候事、

一白杵旅宿之義ハ明廿八日返書有之旨被申聞候、

右之通今日御兵議所有之被相違候、付而者見習之者并未勤之方願書差出方ニ入ニ付、今夕歟明早朝御一同様御評議御決定として、

組内屯所江御寄可被下候、已上、

廿七日

屯所
当番

南北

元与力中御一同様

同

元同心一同様

ここには与力・同心らの快気や家族の困窮に関する歎願書、見習の者の取扱に関する願書が評議されること、また王政復古後も勤務に出た者や勤務に出られない者もいたことなどが兵議所で検討されたこと、さらに豊後臼杵への出張に関する旅宿のことも書き上げられている。奥書にはこれら五ヶ条が評議され、見習や未勤務の者の願書の差出方も評議決定されたので、二十七日夕方か二十八日早朝に屯所に寄ることが指示されている。

正月の歎願書以後の本格的な求職活動は、まず「卯二月」（寅二月の誤りとみられる）「徳川家臣其外悔悟勤王之事奉願上候者共御当地江罷在候家族人員等取締御書付」の差し出しである。²²この冒頭には「御書面之通岩倉殿江建白相済候申候、致一読候」と、元所司代方・元町奉行方・元御附方・元城番方・元御殿方・元御鉄炮方・元御蔵方・元御茶園方、元火之見方元地組の与力・同心らが共同で岩倉殿へ建白を済ませたことを記している。それが慶応四年正月付けの歎願書（建白）である。その代表者が元二條御殿預三輪嘉之助、元町奉行組与力砂川健次郎（西）・草間剛五郎（東）の三人であった。

書付は、徳川の家臣とその他の者がこれまでを「悔悟」して勤王を

願っているのだ、その者たちに家族人員などを書き上げたこと示している。

徳川家臣其外悔悟勤

王之事奉願上候者共御当地江罷在候家族人員等取締御書付

印 三輪嘉之助

印 砂川健次郎

印 草間剛五郎

去月廿三日私被為

召、徳川家臣共其外今般之

聖諭奉感伏、兼而在京又者坂地江立帰悔悟憤発勤

王之赤心を以奉歎願候者并坂地江未帰もの之家族者別ニ（寛大カ）

思召も被為在候間、人員等終始事実ヲ相糺、乍併近年屢変革ニ而

或者文官ヲ武官相成、随而秩禄高下仕候類者姑ク不論、二百年

来流布仕候与力・同心等与唱呼秩禄江復古仕取調可奉申上旨被

仰渡、向々差上願書類捨御下ヶ候ニ付、御趣意之通局々ニ而

為取調候処、別紙帳面冊之通御座候、依之人物・品格・才芸之

有無等奉申上候得者、其器ニ応し御採用可被 成下候哉、御内

命追而相考候処、右取調者実ニ不容易、私共微力ヲ以難行屈恐

悦仕候間、又々被命候様仕度奉存候、左候迎数多之人物を探索

仕候ニ者竟不之日月経過可仕候、流浪仕候もの共或者其間窮ニ

迫り万一謬而身を果し候者抔出来候而者今般之奉対

御仁徳恐悦至極ニ奉存候間、可相成御儀ニ御座候得者、何茂勤

王之歎願者速ニ御聞届被成下、聴仏断獄要路之地御人撰者格別御

奉公奉願候者共是迄勤馴候筋二候、先御職被属正邪智託者其長
管適當仕、一同感復可仕哉与奉存候、依之局々より差出候帳面
冊分、人員類分帳沓冊相添、此段奉申上候、以上、

卯二月

三輪 嘉之助

砂川 健次郎

草間 剛五郎

これによると、去月二十三日つまり正月二十三日に代表者三輪ら三名が召し出されて、元与力・同心およびその家族の人員、二百年來の与力・同心の唱呼、秩祿などを取り調べるように命じられた。またこれまでの願書類は取り下げて、色々と取り調べ別紙帳面冊(冊数不明)のようになった、これによって人物・品格・才芸の有無を申し上げれば「其器二応し御採用可被 成下候哉」と考え、取り調べたが容易ではない、もし行き届かないところもあるだろうが、それについては又指示してほしいと考えている、しかし多人数の探索は月日もかかり、流浪している者らは困窮のために誤謬を犯すこともあるだろうから、速やかに歎願を聞き届けていただいて、これまでの勤めの経験を生かせるようになれば、一同「感腹」するであろうと、記している。

これからみると、三輪他三名が一月二十三日に召し出されたのはさきの廻章に示された評議結果を知らせるためで、慶応四年正月の歎願書のうち見習と未勤務の者の分はいずれも二十七日の廻章に従って差し出されたといえよう。同様の廻章は御門番組だけではなく京都の元与力・同心すべてに出されとみられ、元与力・同心らの歎願に対する新政府の回答とみることができる。それを踏まえた指示の内実が二月

付けの書付であり、与力・同心の人員と家族などの調査であつた。

これらに対して、元与力・同心らは新政府の指示に従って人員・家族人数、また人物・品格・才芸等を取り調べ、それぞれ元の組ごとに調べた帳面を差し出した。それが同年五月付の歎願書・口上書、家族人数の書き上げである。元の御門番組与力・同心は同年五月、改めて小倉弥平次(元与力)・中川万次郎(元与力)・有馬剛三郎(元同心)を「元城番組家族取締」にして、岩倉殿執事山本復一郎宛に歎願書を差し出している。²³⁾

奉歎願口上書

私共同局旧臘坂地江罷越候後、未立帰もの共之家族之者儀、手職仕或者家財等売払又者親類杯之助力等を以漸此節迄細々取凌罷在候得とも、何分職業も抄々敷出来不申追々難渋二相成、信義を不失様親類よりも成丈ヶ救合候得共、局中一統之難渋ニ而難行届、此上之活計不覚束及場合、此姿ニ而ハ差迫万一心得違いたし候もの出来候而者第一奉恐懼候、右之趣御慈察格外之以御仁憐御救助被成下候得者、家族一統広大之聖慮、実以難有可奉感裁候、依之先達而より御救助頂戴仕候小嶋激太方家族之ものハ相除キ、居残罷在候数書差上、此段謹而奉歎願候、以上、

慶応四辰年五月

元城番組家族取締

有馬 剛三郎印

中川 万次郎印

小倉 弥平次印

岩倉殿御執事

山本復一郎殿

これには「家族困窮ニ付奉願上口上書」と題された元城番組惣代藤田武一郎・鈴木重兵衛・小倉弥平次による三輪宛の書簡が添付されている。その一つが先に触れた小嶋激太とその家族の困窮と救済を求める添簡である。これも含めて、この口上書では未帰京者すべての困窮した家族の救済が歎願されている。

元町奉行組与力・同心や御門番組の元与力・同心をはじめ京都の元与力・同心すべてが岩倉具視執事宛に同様の歎願書を差し出し、正月から五月にかけて共同・協力して求職活動を展開していた。その結果として、元与力・同心らの人員・家族、人物・品格・才芸の有無などの調査が命じられたのである。

取調は元町奉行組・二條城番組などそれぞれの組ごとに書き上げられている。家族人数については「慶応四辰年五月 家族人数書」、「元二條城番与力同心人数書」、「元二條城番組姓名帳」、「姓名書」などの表題で、それぞれの組惣代から報告があげられている。²⁴

元城番組の歎願書には、歎願口上書と在京の者・留守宅家族の者の合わせて三巻に作成していたが、山本復一郎の指示で一卷にしたとある。冒頭には「慶応四辰年五月 奉歎願口上書 在京之者一卷 留守宅之者家族向二巻 合而三巻ニ而差出候処、矢張巻ニ而可差出旨山本被申候ニ付、忝紙ニいたし差出候事」とあり、続いて「奉歎願口上書」が記され、元城番組の与力・同心名とその家族人数が書き上げられている。

それによると、歎願書は元城番組惣代鈴木十兵衛・藤田武一郎・小倉弥平次から岩倉殿執事山本復一郎宛に、「追々疲弊仕必至難渋二相

成、此姿ニ而者活計ニ拘り候及場合、実以困苦仕候ニ付」救済を願っている。²⁵

これは元与力・同心の担当が岩倉殿になったことが廻章されていたが、それを受けて執事宛に差し出されている。城番組元与力一七人、元同心一六人、その家族が一四九人で、その内訳が当主三四人、家族の者一一九人であったことを書き上げている。

また人物・品格・才芸については、「元二條城番組性名帳」²⁶に与力・同心ごとに才芸の内容と下坂と在京、未帰京の区分が記されている（前出）。才芸は剣術・砲術、馬術のほか漢字などの学問も才芸として書き上げられている。いずれも山本復一郎の指示に従った記載になっている。

京都の元与力・同心らが「悔悟憤発」して勤王の赤心から慶応四年正月から五月にかけて、「岩倉殿江建白」・歎願書を差し出し、新政府へ求職活動を行っていた。元町奉行組だけでなく、他の元与力・同心らも岩倉氏に宛てた同様の歎願書を差し出している。大政奉還への与力・同心らがまずは生活の維持、職の確保のために共同行動を取ったのである。

四 府兵の創設と元与力・同心の登用

所司代・町奉行・御附・城番・御殿・御鉄炮・御蔵・御茶園・火之見・地組に属していた元与力・同心・下役人らは、大政奉還・王政復古・明治維新という政権交代によって、与力・同心の地位を失い、職

場を失い、途方に暮れながら困窮した状況に陥りつつあった。

元与力・同心たちは激変に対して新しい職場を探した。慶応四年（一八六八）正月から五月にかけて岩倉具視の執事宛に歎願書を差し出し、各人が持つ剣術や馬術、鉄炮から漢学まで、身につけていた技能を書き上げ、新政府への登用を願った。

これら元与力・同心の切実な要望に対する新政府の応答は、元与力・同心を基盤にした京都市中の警固と治安維持のための武装兵隊部隊の創設であった。それが洛陽隊の創設、それを名称変更した平安隊の創設であった。

慶応四年は九月八日に改元され、明治元年となった。新政府はやっぱり京都市中の新統治機構の編成を始めた。まず元年正月十日には烏丸三条東入町にあった市中取締所を元の東町奉行所へ移すことになり、同十一日に移転した。同時に、市中巡邏に当たっていた松浦肥後守・加藤能登守が職務を免除され、同月二十五日には慶応三年十一月以来市中触頭と公事訴訟の取扱を命じられていた雑色もその役目を免除された。²⁷

元年閏四月二十九日には京都府が発足した。京都の元与力・同心らは各府県の貫属として、同三年十一月には士・卒の身分に位置づけられた。元町奉行組（西町）与力であった木村兼綱は士族として、元年六月から京都府執事つまり府掌として任用されている。²⁸

このような治安維持統制機構編成の動きのなかで、京都府は府兵の創設を企図した。それが洛陽隊の編成である。その趣意書の内容は京都府独自の「土着不同之兵」とするために、兵隊を創設して京都市中

と山城国全域の土地を守衛することを目的としていた。元所司代組与力岡田良之助の残した同年八月の記事には「御趣意書写」として、末尾に「洛陽隊江入隊被仰付候事」と記されている。²⁹

今般京都府兵隊御組立に相成、洛陽隊与相唱候、第一御守衛を旨し、市中者固より山城国全国之土地を守り、土着不同之兵と相立、勤

王志願之者ハ撰之入隊被 仰付候二付、厚ク右之御趣意を奉シ精々勉励いたし候様被 仰付候事、

但追而操練熟否検査之上隊次甲乙被 仰付候二付、先当分之处惣隊混雜之儘無他念操練一途之心掛、精々勉励いたし候様被 仰付候事、

八月

洛陽隊は京都府が徳川政権のもとでの京都所司代・町奉行、二條城御門番等の役職、あるいは雑色に代わる治安維持・警察機構として設置し、京都府兵隊として位置づけようとしたものであった。その際に勤王志願の者であれば、徳川政権のもとでの勤務者でも拒否はしないことを示しているが、これは元の徳川政権で勤務していた役人、特に京都土着・地付の元与力・同心を前提にしていた。当然、慶応四年正月の与力・同心らの歎願、新政府への登用要望に対応した動きであったことは確かであろう。

洛陽隊は各藩の藩兵による警固体制ではなく、京都「土着」の兵隊の創設、新政府直属の兵隊の創設であった。岡田良之助は、この趣意に基づいて慶応四辰年八月十日に京都府に呼び出された。二條城大書

院の間へ四ツ時（午前一〇時ごろ）に武刻羽織袴の正装で出仕し、京都府判事長谷ほかの役人が居並ぶ前で洛陽隊への入隊を申し付けられている。

趣意書写によると、兵隊は操練の熟否を調査して「甲乙」の隊次に分けられること、当面は「惣隊混雑」しているので「操練一途」を心掛け「精々勉励」するようにとの但し書きが付けられている。³⁰ 取り敢えず訓練が仕事とされているように、洛陽隊創設が企図された段階では兵隊組織の編成・構成は兵隊要員の調達も含めて白紙状態であったことが窺える。

岡田良之助は洛陽隊兵隊の仕事として、八月十五日から操練のために「府練場」へ出頭を命じられたが、出仕時の賄いは直に定められるともあり、洛陽隊の創設が事前の準備もない、応急の創設であったことを裏付けている。

良之助は十五日から「兵隊御用懸り」として勤務に就き、兵隊の入隊に関する事務を取り仕切る仕事をする事となったが、同日には「平安隊と唱替」えられることが指示された。これを受けて、元年十二月十五日には、永久の規則を立てるまで「会食」として二人扶持を与えること、入隊は一家に一人に限ること、十一月までの操練出勤者には一人当たり弁当料五合、銭六百文の支給が決められている。³¹

また平安隊は編成の目的を「京都下乱暴人取押被 申付候条、毎夜式百人宛穩便ニ市中廻番いたすへき事」を目的として、元所司代・町奉行所与力・同心を主体に四〇〇名で編成された。その編成と構成は、表8に示したように一隊九六名からなり、四隊編成であった。これに

兵隊御用掛四名が加わる。組織は大隊士―教頭・助教―中隊指令士・小隊指令士・半隊指令士、右嚮導・左嚮導、喇叭長などで構成され、これに剣術引立方（頭取―引立方）と剣術場監察が配属されていた。

「廻町規則」によれば、勤務は「乱暴人取押」という治安維持・警察機能を目的にしていたため、二隊二〇〇人づつに分かれて、当番・非番を繰り返して勤務時間は夜六時から明六時の間、毎夜巡廻していた。それは当番が毎夜二十手に分かれ巡廻、引請方は一手十人とし、会所代を拠点に五人が交代で巡見すること、廻番中の乱暴人は搦め捕り府へ差し出すこと、町人からの申し出あれば搦捕、番手ごとの持ち場割に応じて対応すること、などであった。³²

慶応三年（一八六七）十二月九日から新政府が平安隊を編成するまで、京都市中の治安維持・警固態勢・機構は慶応三年十二月十三日・十五日、さらに十二月十八日の触書に見られるように、混乱していたといつてよい。³³

おわりに

大政奉還後、京都の与力・同心は主君である將軍を失い、途方に暮れていた。その状況に対して、与力・同心は新政府での働き場を求めて救済の歎願をしていた。人材・人員の不足する新政府の対応が洛陽隊・平安隊の創設であった。

このち明治二年（一八六九）七月四日には平安隊の称号を廃止し、警固方として再編成したが、これが七五〇人で編成される警察機構の

表8 平安隊・警固方の編成

平安隊の編成(明治2年5月2日以降)			警固方の編成(明治3年12月以降)		
役名	人数	名前	役名	人数	名前
大隊士	1	佐藤柳三郎(大隊司令助役石田鉄太郎)	御用掛り	4	内藤音三郎・大野龍之助・大塚猪蔵・佐藤柳之助
教頭	1	安藤伍一郎	御用掛り 助役	13	榎本直吉・石嶋搜太郎・太田岩之助・三浦傳三郎・砂川督太郎・戸田鉄太郎・□□助太夫・大野機次郎・小野六郎・法貴次郎兵衛・大野多宮・真壁久三郎・廣瀬真蔵
助教	1	大野機次郎		65	安藤伍一郎・藤井政吉・大塚道蔵・酒井惣助・茂木柳助・平尾謹之丞・山田徳太郎・佐合森助・岡山録之助・藤田嘉助・赤井創蔵・大塚源三郎・佐々木廣蔵・澤田辰三・井上郁之助・法貴弘五郎・石川菊三郎・木寺確蔵・齊藤安三郎・中川登代蔵・大橋源吉・大西八蔵・古在卯之助・神応元太郎・長野貫太郎・森山甚三郎・山田順八郎・西尾直之助・石川準吉・原田驥間太・山口一郎・高屋□蔵・三浦信三郎・吉田直次郎・須賀井発之丞・飯室一郎・安藤捨之丞・田村憲八郎・佐野常次郎・山口確太郎・細井季三・田村辰之助・小原金吾・向坂清次・中嶋擴三・吉居義作・柏原直之助・井澤時太郎・大嶋直一・吉田嘉三郎・奥崎金右衛門・羽田駒三郎・柳下鉄次郎・小木友八・久保小藤太・向坂英之助・早苗可郎・森茂次郎・柳下唯三・吉竹徳蔵・小澤祐一・下田平蔵
中隊指令士	5	小野六郎・星野寛太郎・須賀井発之丞・藤田嘉助・飯室一郎	伍長		
小隊司令士	5	山口一郎・安藤捨之丞・赤井創蔵・森山甚三郎・西尾直之助			
半隊司令士	10	原田驥間吉・澤田辰三・木寺確蔵・井澤時太郎・桂春之助・吉居八太郎・山崎直之助・平尾謹之丞・田村憲八郎・山田順八郎			
右嚮導	10	法貴弘五郎・太田直次郎・中増櫛三・井上邦之助・山口確太郎・茂木柳助・神応元太郎・齊藤安三郎・佐野常次郎			
左嚮導	10	中川登代蔵・細井季三・田邊敬次郎・向坂英之助・戸田十蔵・大西八蔵・中川亀之助・岡山録之助・並河四郎・木寺寛之助			
半隊右嚮導	10	永田創次郎・柳下鉄次郎・中松順吉・木村鶴太郎・羽田為次郎・澤田欽次郎・塩津達次郎・吉田岩三郎・前田競・石川菊三郎			
左嚮導	10	野田千左衛門・柳下唯三・岡田良之助・岡田松蔵・上田真六郎・鳥居豊三・桂専太郎・佐々木廣蔵・山本惣太郎			
惣押伍	1	山田徳太郎			
鞍手長	1	早苗可郎			
喇叭長	1	藤井柳弥			
合計	68				
剣術引立方					
頭取	3	安藤伍一郎			
引立方	20	佐和従之助・三浦信三郎・佐々木廣造			
剣術場監察	5	大塚源五郎・小澤鉄之助			
総計	96			82	

備考：岡田家文書(神戸市立博物館)による。

確立となる。警固方は明治二年七月十三日の京都府達によって、元與力・同心、元足軽、伏見の同心、無役などを残らず組み入れて編成された。警固方の編成は、岡田良之助の組の構成をみると、元所司代組三五人、元町奉行組二三人、元御附組六人、元御門番組一八人から成っており、旧与力・同心の治安維持・警察機構の性格・実態を残して再編成されたことを示している。³⁴⁾

この後、警固方は明治五年十月十三日に羅卒、明治六年には番人、八年三月には羅卒、八年十二月に巡查へと整備されるが、これまでの検証からみれば、近代の警察機構は基本的には近世与力・同心体制の明治期警察機構への転換(継続)であったといえよう。³⁵⁾

〔注〕

- (1) 丹羽家文書256「奉歎願口上書」。なお番号は整理番号。この歎願は慶応四年正月三日（または九日）に御取締役所から出された「実ニ悔悟いたし、朝廷之御用ニ相立度可存込候者ハ、寛大之思召ニ而御取用可被在為候」とある触書に対応したものであろう。『京都町触集成』第十三巻（岩波書店、一九八七）、三九一参照。
- (2) 京都市中の治安維持に関しては、従来から指摘されているように、京都所司代与力・同心、京都町奉行与力・同心のほかに雑色の役割が大変に大きい。雑色に関する研究の進展はあまりないようであるが、今後に期待したい。
- (3) 近世京都の与力・同心については、『京都の歴史』第五巻・第六巻の叙述、安国良一「町奉行所の役人」（京都町触研究会編『京都町触の研究』岩波書店、一九九六）などがあるが、いずれも『京都御役所向大概覚書』『京都武鑑』などによる機構からみた研究である。最近の研究では、所司代与力・同心の相続や勤務実態については小野田一幸「京都西町奉行所与力木村家と家中奉公人について」（『神戸市立博物館研究紀要』第二十六号、二〇一〇）、同「京都西町奉行所同心の動向について」（前同第二十七号、二〇一一）があり、近世京都の与力・同心の地付・土着化の経過については、拙稿「近世京都における与力・同心体制の確立」（佛敎大学『歴史学部論集』第二号、二〇一二年）で検証した。
- (4) いまのところ文久二年（一八六二）以後の京都の通史的な叙述は『京都の歴史』第七巻によるところ大で、その史料的真付けも『史料京都の歴史』による場合が多い。もちろん政治史的な動向は幕府側・禁裏側それぞれの観点からの数え切れないほどの緻密な研究があるが、徳川政権の与力・同心の勤務態勢や職務実態に関する研究は多くない。
- (5) 新撰組や京都見廻組も同様の意図のもとに設置されたと見られている。『京都の歴史』第七巻維新の激動参照。『京都の歴史』では、これらの設置は京都所司代・町奉行の機構では尊皇攘夷と倒幕に関連した天誅の横行を押さえきれなくなったためであるとしている。所司代・京都町奉行は本来市中町民らの生活や商業・職人活動に関わる秩序維持・治安維持が職務であり、乱暴者などの生活秩序の混乱・破壊を乱す者を取り締まることであった。しかし所司代・町奉行が侍・武家出身者らの乱暴に対する規制や、またその取締・捕縛ではなかったことから、たんに天誅の横行に対処できなかったためというだけではなかったといえよう。
- (6) 『続徳川実紀』第四篇、文久二年閏八月廿八日の条。
- (7) この点は京都見廻組の新規編成でも譜代と抱の区分が意識されており、この身分的な確認も文久二年の組支配の者たちの身分規定に対応しているとみてよい。木村家文書「太政官通達覚」（神戸市立博物館所蔵）に書留られている。
- (8) 大坂町奉行所の与力らをはじめ各地の遠国奉行の与力・同心は、新任の奉行が着任する度に誓約書・由緒書を差し出して職務継続の更改を行っていたが、それと同時に、特に与力は將軍家の譜代家臣としての認証を求め、譜代並の確認を求めている。拙稿「大坂における与力・同心体制の確立」（佛敎大学『文学部紀要』）、拙著『大坂町奉行所異聞』（東方出版、二〇〇六年）
- (9) 木村家文書「太政官通達覚」（神戸市立博物館所蔵）。
- (10) 木村家文書追加「辞職願」、丹羽家文書。
- (11) 『続徳川実紀』第五巻、慶応三年十二月十二日の条。この経緯を同月九日の記事として「此日將軍職御辞退被聞食」および守護職と所司代の免職、さらには「十二日 此日於坂地被触將軍職御辞退御聞届之事」と記している。
- (12) 『京都町触集成』第一三巻、卯十二月触書三六四。
- (13) 『京都町触集成』第一三巻、触書三六五。冒頭に「今度御一新大変革ニ付而者非常御手当之ため」とあり、新政府の緊急対応であった。『京都の歴史』第七巻参照。
- (14) 丹羽家文書270「元二條城番性名帳」。
- (15) 丹羽家文書259「尾張殿旧領岩倉殿へ引渡相勤ニ付覚」。
- (16) 丹羽家文書276「歎願書」、279「歎願書」（「慶応三年覚書」）。

(17) 大政奉還後に御門番組の頭二名も江戸に帰り、頭がいなかったため

ろう。慶応二年の御役録では頭は和多田与八・葉若飢蔵であった。三年版では記載がなく、二條御殿預の三輪も記載がない御役録もある。大政奉還の影響があったとみられる。『京都武鑑』下(叢書京都の史料8、京都市歴史資料館、平成一六年)。

(18) 丹羽家文書²⁵⁴「奉歎願口上書」、添簡「家族困窮ニ付奉願口上書」。

(19) 丹羽家文書²⁷⁹「歎願書」(「慶応三年覚書」)。

(20) 同、260「口上書之覚」、²⁷⁷「再勤歎願書」。

(21) 同、265「廻章」。

(22) 同、258「岩倉殿へ建白」「歎願書」

(23) 同、254「奉歎願口上書」、添付書簡1「家族困窮ニ付奉願口上書」。

(24) 同、「慶応四辰年五月 家族人数書」(261)、「元二條城番与力同心人数書」(261)、「元二條城番組姓名帳」(270)、「姓名書」(273)。

(25) 同、257「歎願書」。

(26) 同、270「元二條城番組姓名帳」。

(27) 『京都町触集成』第一三卷、『京都の歴史』第七卷。

(28) 木村家文書(神戸市立博物館所蔵)。大津代官所同心の佐久間琢蔵も大津縣貫属の卒として大津町方取締を命じられている。『新修大津市史』、佐久間家文書(佛敎大学所蔵)。

(29) 岡田家文書9「諸事留書」(神戸市立博物館所蔵)

(30) (31)(32)同、「諸事留書」。

(33) 『京都町触集成』第一三卷、卯十二月十三日触書三六五、触書三六四。その但し書。触書三六五。

(34) 岡田家文書9「諸事留書」。

(35) 洛陽隊・平安隊から警固方への編成過程とその構成は別稿で検討する予定。

【付記】 本稿で用いた丹羽家文書の閲覧・使用については、丹羽氏昭氏のご高配を得た。また岡田家文書・木村家文書については神戸市立博物館のご高配を得た。記して謝意を申し上げる。

(わたなべ ただし 歴史学科)

二〇一三年十一月十五日受理